

日本初の *TOEIC*® L&R 公開テスト¹⁾ 点字試験実現への道のりと現状

The Paths to Realize the First *TOEIC*® L&R in Braille in Japan and its Current Status

太田智加子

(国立大学法人筑波技術大学 障害者高等教育研究支援センター)

Chikako OTA

(Division of Research on Support for the Hearing and Visually Impaired, Research and Support Center on Higher Education for the Hearing and Visually Impaired, National University Corporation Tsukuba University of Technology)

要旨：

本稿では、2014年まで日本では実施されていなかった *TOEIC*® L&R 公開テストにおける点字試験の実現について述べる。まず、視覚障害者が受験に際してかかえる困難について指摘し、次に、昨今の日本において、進学・就職・就業継続等の際に *TOEIC* のスコアが重要性を持つことについて指摘する。最後に、*TOEIC* 公開テスト点字試験が実現した過程について報告し、約4年経った現状と社会的反響について述べる。そして、この一連の点字試験実現の過程に協力した視覚障害学生が、自らの主体的な学びが社会を変えていくことを経験したことについても言及する。本稿を、すべての人々が平等な権利を享受できる公正で包摂的な社会の実現に向けた一提言とする。

キーワード： *TOEIC* 公開テスト点字試験、日本初、視覚障害学生の主体的学び、公正で包摂的な社会

Abstract

In this review article, the author describes how she cleared the Test of English for International Communication® (*TOEIC*) in braille, which was not implemented in Japan until 2014. First, the difficulties that people with visual impairment face in taking the *TOEIC* are demonstrated. Second, the importance of the *TOEIC* in modern Japanese society to try to pursue higher education, secure employment, and access vocational opportunities is elaborated. Finally, how the first braille version of the *TOEIC* was implemented in Japan is described, and its current status as well as its social impact for up to four years after its introduction is reported. Furthermore, the author finds that visually impaired students are initiatively engaged in the experience to contribute to social changes. This article presents a proposal for the realization of a fair and inclusive society where everyone can have equal rights.

Key Words: First TOEIC in braille in Japan, Visual impairment, Students' engaged learning, Fair and inclusive society

1. はじめに

視覚障害者が英語の資格試験を受験する際には、さまざまな困難が付きまとう。視覚障害の態様は多様であるうえ、文字を読むことに困難をかかえる状態で、非母語である英語を修得し試験に挑戦するのは大変な努力と意欲を要するためである。

一方で、ここ15年ほどの間に、進学、就職、就職後の就業継続や昇格等の条件として、TOEICの一定以上のスコアを求める企業・団体等が増え、社会的な注目度が高まっている。このため、筑波技術大学（以下、「本学」とする）春日キャンパスでは、2011年度から、視覚障害者特別措置による Institutional Program（団体特別受験制度。以下、「IPテスト」とする）を、天久保キャンパス（聴覚障害系）と同時に開始した。この、視覚障害者特別措置による IP テストの実施は、国内初・本学初の事例となった（太田（2013）、太田（2014））。

TOEICは、学生にとっては就職・進学対策等として、社会人にとっては就業継続・昇進・海外赴任者選抜の条件等として需要が高いが、公開テストにおける視覚障害者特別措置としては、点字試験だけが長く実施されていなかった。しかし、意欲的な視覚障害者はむろん存在し、点字使用者のみ公開テスト受験機会がない状態は、早急な改善を要すると考えられた。実際、筆者が2011年9月に行った本学天久保キャンパスでの「聴覚障害学生向け TOEIC 対策講座」のニュース²⁾を見た学外者から、公開テストでの点字試験受験の可否についての問い合わせが増加した。一定の TOEIC の点数を取得することを就業継続の条件として示されたという著名な国際機関の日本支部勤務中の社会人、司法試験勉強中の社会人なども含まれていた。

このため、IP テストが実現した後の次なる課題は、公開テストにおける点字試験の実現であった。そしてついに2014年11月、日本では初

の事例となる、公開テストにおける点字試験が実現した。これは、大学等に学ぶ視覚障害学生のみならず、視覚障害者全般にとって画期的なニュースであり、本学 HP ニュースにも掲載されている³⁾。

本稿では、TOEIC 公開テストにおいて点字試験がどのように実現したかについて、そして、実施から約4年経った現状や社会的反響について、報告する。TOEIC 公開テストという一つの資格試験を通してではあるが、すべての人々が、持てる能力を最大限に生かしてすべての挑戦機会を平等に享受できる、公正で包摂的な社会の実現のための一提言としたい。

2. TOEIC の社会的重要性

TOEIC は、1979年に始まった990点満点で英語のリスニング力/リーディング力を測る試験で、年に8回の公開テストが行われている。2007年からはスピーキング/ライティング試験（= TOEIC® Speaking & Writing Tests、通称「TOEIC S & W Test」）も始まった。

問題を作成しているのは、米国の国家試験・資格試験の大半を実施している非営利テスト開発機関 Educational Testing Service（以下「ETS」とする）である。日本での TOEIC を運営する、一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会（以下「TOEIC 協会」とする）が行った2017年の統計では、公開テストの受験者は、世界約160ヶ国で年間約700万人、日本では年間約19万人である。

TOEIC 協会がまとめた統計「上場企業における英語活用実態調査2013」によれば、IP テストを採用している上場企業に行ったアンケート結果では、IP テスト実施の目的は、多い順に、「自己啓発」(66.2%)、「研修(参加基準・成果測定等)」(43.6%)、「人事ファイルへの記録」(30.8%)、「社員への受験義務付け」(17.9%)、「昇進・昇格の要件」(17.5%)、「海外赴任者選抜」(17.3%)、「その他社内基準」(15.3%)、「配属・配転の基準(海

外赴任を除く) (11.0%)、「採用の基準」(6.3%)である。社員が継続的に英語学習を行うための動機づけとして約7割の企業が活用している、というデータが示されている。

3. 点字受験実現に至る道のり

公開テストにおける視覚障害者特別措置で、2014年10月時点で実施されていなかったのは、点字試験のみであった。

資格試験では、受験者間の完全な公平性が担保されなければならない。試験時間延長措置にもいえることだが、点字使用歴が長く速読が可能な受験者と、中途失明等により読解に時間を要する受験者とが混在する中、一律2倍の試験時間延長措置が、墨字受験者をも含む受験者間に完全な公平性を担保できるか否かを判断するのは難しい。このため、制度の改革には慎重な判断が望まれたであろう⁴⁾。また、点字試験問題の作成には墨字より時間を要するという事情、点字試験問題はすべてETSにて作成され日本での受験需要に応じて送付されてくる、という時間的制約もある。このような背景から、公開テストにおける点字試験実施には一定の時間を要したことが理解される。

1章にて既述の、「聴覚障害学生向け TOEIC 対策講座」のニュースに、「学内試験(= IP テスト)が11月実施」の旨が記載されたこと、太田・松藤(2012)・太田(2012a)・太田(2012b)などにより、学外者からの問い合わせが増加した。内容は、「『視覚障害者は TOEIC を受験できない』という認識が長く浸透していたが、筑波技術大学の HP を見た人が『受験できるようになったようだ』という情報を得て、視覚障害者団体の間でも広まっている。詳細を教えて欲しい」「職場での TOEIC 受験の必要性が増す中で、公開テストでの点字受験について情報を探しているが、なかなか有用な情報がない」「『点字毎日』に『TOEIC の点字受験が可能になった』という記述があったが、詳細が不明なので教えて欲しい」「どのようにして学生達に点字受験指導を行っているのか」などであった。学内者を通じた学外からの照会や、学内からの照会もあった。

視覚障害者特別措置による IP テスト実現は、

全国の視覚障害者にとって大きな福音となりえたと考えられた。文部科学省による「平成26年度に係る業務の実績に関する評価結果」でも、高い評価を受けている。

しかし本学学生達は卒業後、就職先の企業・団体等が IP テストを実施していない限り、公開テストを受験することとなる。実際、IP テストを実施している企業・団体等は多くはない。このため、点字使用学生は、本学卒業後は TOEIC 受験自体が不可能になってしまうケースが多い。また、所属企業・団体のない視覚障害者は、もともと公開テストしか受験できない。このように、点字試験が実施されていない以上、TOEIC 受験自体が不可能となるケースは多い。

この状況を打開すべく、2012年～2014年、TOEIC 協会と協議を重ね、日本においても点字受験が可能となるよう要望を続けた。2014年2月、TOEIC 協会から関係者が来学し、本学における IP テスト点字試験の様子を視察した。受験後には、受験者に対し意見聴取がなされた。受験者から出された意見は、以下のようなものであった。

- ・米国式点字用紙は日本より大きい(日本では多くが8×11インチ、米国サイズは10×11インチ)、体を左右に動かしながらでないと読めない
- ・ページ番号が日本では右上、米国式では右下に打刻されているため、慣れるまでは問題内容と勘違いしてしまったことがあった(ただし、問題冊子表紙の「注意書き」に、その旨記載あり)
- ・日本式は表面印刷、米国式は表裏印刷のため、裏面の点字が表に飛び出していることがあり、慣れにくい
- ・米国式は行数が多く、行間が詰まっているので、1度に2行読んでしまうことがある。指が太い人や手が大きい人はどう対処しているのだろうか
- ・空欄表示法が、日本式は「[]」、米国式は「—」のため、米国式に慣れる必要がある
- ・Part6(長文穴埋め問題)は、見開き2ページで大問1問分となっていて、問題文が左ページに、選択肢が右ページにある。選択肢が入る空欄が左ページのどこにあるのか分かりにくいので、問題文のすぐ下に選択肢があるとありがたい

TOEIC 協会は、公開テストにおける点字試験実施に向けての本格的な準備を進め、2014 年度第 4 回(10 月 26 日実施)の公開テストにおいて、本学の点字使用学生 2 名がパイロット受験の機会を得た。TOEIC 協会は、実際の公開テストを想定し、丁寧なシミュレーションを行い、受験者に感想や改善要望等を聴取した。以下のような意見が聞かれた。

- ・試験会場では、全盲者でも分かりやすい場所で待ち合わせをして頂き、安心した
- ・試験前に、問題冊子表紙の注意書きを読む時間を十分取って頂き、口頭での説明もあり、落ち着いて心の準備ができた
- ・誘導は、曲がり角で直角に曲がって頂くような丁寧なものであった。視覚障害者ははじめての場所では戸惑うが、自力で移動する努力は普段から行っているのも、もっと緩やかな誘導でも大丈夫である
- ・解答後は、自分の解答内容を 1 問 1 問読み上げて確認頂けるので安心できた
- ・受験者 1 人 1 人に、試験前の誘導から試験後の見送りまで丁寧にして頂き、感動した
- ・とうとう公開テストでも点字受験ができるのかと思うと嬉しい

4. 公開テストにおける点字試験の現況と社会的反響

上記の経緯を経て、2014 年 1 月から公開テストにおける点字受験が可能となり、以降、約 4 年が経過した。以下、現状と、公開テストにおける点字試験の実現が与えた社会的反響について述べる。

現在、点字試験は、札幌・宮城・東京・愛知・大阪・広島・福岡の 7 会場で、年 2 回実施されている。プライオリティ・サポート全般については、「一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018) プライオリティサポートについて。一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, http://www.iibc-global.org/toEIC/priority_support.html, (2018/9/30)」に詳しい。

点字受験については、上記プライオリティサポート URL 中の点字受験用サイト、「一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会

(2018) 点字受験について。一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, http://www.iibc-global.org/toEIC/priority_support/tenji.html, (2018/9/30)」に詳しい。

受験者数は、2015 年 1 月 1 名、同 7 月 4 名、2016 年 1 月 7 名、同 7 月 8 名、2017 年 1 月 5 名、同 7 月 10 名、2018 年 1 月 13 名、同 7 月 11 名、と徐々に増加傾向にあり、2017 年 7 月からは 2 桁が続いている。受験者へは、事前にサンプルテストが送付されるので、前もって当日のテストの流れを確認することができる。

なお、2016 年度から、英国・米国で UEB (Unified English Braille) が導入され、英語圏の 8 ヶ国で採用されている。日本でも、従来、米国式英語点字 EBAE (English Braille American Edition: 2 級点字に該当) が広く使用されてきたが、この動きを受け、英語の教科書や試験問題等については、2016 年度から順次 UEB へ移行していくことになった⁶⁾。これにともない、TOEIC 公開テストにおける点字試験も、2017 年までは EBAE のみで行っていたが、現在は、EBAE か UEB のいずれかから選択して受験できる。

事前にサンプル問題の送付・貸与が行われること、持参した点字器 (点字盤・点字タイプライター) によって教室が分かれること、などきめ細やかな対応もなされている。また、写真描写問題や図・グラフ・表などの中でも視覚情報に依存する設問は、IP テストと同様に点字受験者は免除され、採点から除外される。

2016 年 10 月 16 日付『点字毎日』に、以下の記事が掲載された。掲載元の毎日新聞社より掲載許可を得たため、抜粋して引用する。

TOEIC の点字受験 個人でも可能、好評に ～弱視者向けの拡大版も～

国際ビジネスコミュニケーション協会 (東京都千代田区) が実施している「TOEIC Listening & Reading Test」の点字受験が昨年 1 月から個人でも可能になり、好評だ。

受験当日は点字盤か点字タイプライターを持参する。試験時間は通常の 2 倍で、リスニング

が約1時間、リーディングは約3時間、リーディングでは、試験時間とは別に20分の休憩が取れる。計200問のうち、写真を見て答える10問は省略される。解答内容は、試験終了後、受験者が読み上げたものを試験官が墨字で転記する。

申し込みは、ネットとコンビニ端末ででき、点字受験を希望する場合は、電話予約が必要。申し込むと、受験番号や会場などが書かれた墨字の受験票が送られてくる。点字受験者にはさらに、同じ内容のメールが届く。サンプルの点字問題（回答とリスニングテストのCD付き）を2カ月間無料で貸し出すサービスもある。スコアはネットで確かめられるが、点字受験者に限り、本人確認の上、電話で伝える。大阪の一般高校で英語教員として働く山本宗平さん（37、光覚）は、今年7月初めて受験し「統一英語点字ではなかったが、問題用紙はアメリカサイズで大きく、行間が詰まっっていて記号も日本と違うので、サンプル問題の予習は必須と感じた。スコアはれっきとした証明として出せるので、ぜひ挑戦して」と話す。〔後略〕

（『点字毎日』2016年10月16日）

2017年2月4日付毎日新聞東京版にも、同社勤務の岩下記者の受験体験記「全盲記者 岩下恭二のユニバーサロン TOEICに点字で挑戦」が掲載された。岩下記者は、『点字毎日』編集部を経て、1998年から人に優しい社会の仕組み「ユニバーサルデザイン」をテーマにネットコラムを配信している。「一般企業への就職を希望する視覚障害者には、企業にTOEIC（原文ママ）の英語力を示せることは大きな力になるだろう。」とあり、これから就職や進学を控えた視覚障害学生のみならず、日本における視覚障害者にとって大きな励みとなることを願う。

このように、TOEIC公開テストの点字試験の実現により、視覚障害者の受験機会が拡充されていることが分かる。

5. むすび

昨今、教育界で大きな議論となっている事柄の一つに、入試における英語の民間試験（ケンブリッジ英語検定・実用英語技能検定・GTEC・

IELTS・TEAP・TOEFL・TOEIC）活用の是非がある。主たる議論は、入試に民間試験を活用することの是非であるが、果たしてこの制度が、視覚障害学生にとって公平な受験となりうるのか、あくまで健常者を前提とした議論になっていないかについても、厳密に検証する必要がある。実際、英語民間試験における視覚障害者特別措置にはばらつきがある。

学校の授業においては、視覚障害者のためにICTを活用した合理的配慮が進みつつある一方で、入試やテストではICT活用が浸透しないことについて、新聞等でもたびたび取り上げられている。

TOEICは何度か問題形式の変更があり、最新では、2016年5月に、リスニングPart3・4に“with and without a visual image”という設問形式が加わっている。リスニング問題を聞きながら図・グラフ・表などを見て設問に答える形式は、視覚障害学生にとっては、内容以前に設問形式の面でしばしば難易度が高い。墨字版とは図表の配置、行数等が異なることが多いため、まずは図表を探すことに時間を要する。また、無事図表を探すことができても、リスニング問題を聞きながら、問われている設問が図表のどの箇所に該当するのかを探すのに時間を要することもある。

民間試験では、合理的配慮は努力義務のため、TOEICにおける点字試験実現により、国内での民間試験でもっとも受験者数の多い英語資格試験における視覚障害者の平等な受験機会の担保がなされたことには、大きな意義が見出せる。

だが、中途失明者など、日本語点字修得段階であり、英語点字修得にまではまだ手が回らないという学習者もあり、音声受験が可能になれば、視覚障害者の受験機会の平等性はさらに上がるであろう。今後、導入の実現に向けて、関係各所と歩みを進めていきたい。

今回実現したのは、TOEIC公開テストにおける点字試験実現という小さな一歩ではあるが、このような積み重ねがやがて、すべての視覚障害者の権利拡充・教育機会均等に向けて着実に結実していくものと確信する。将来、S&Wテスト、TOEIC Bridge 他、未だ視覚障害者特別措置

が導入されていない、あるいは十分とはいえない試験についても、点字受験が可能となることを願うものである。

最後に、このたびの TOEIC 公開テスト点字試験実現に至る経緯において、点字使用学生自身に意義深い主体的な学びが見られたことも、指摘しておきたい。IP テスト受験の際の学生達の努力が、公開テストにおける点字試験を実現させる原動力となったこと、IP テスト受験を通して視覚障害当事者としてのさまざまな「気づき」を得たこと、その声が実際の公開テストに活かされたこと、そしてそれらが公開テスト受験者の声と符合し、社会を動かす力となっていったことが指摘できる。

この経験は、視覚障害学生自身が、視覚障害者の権利拡充のために行った努力により社会を変えた一例といえる。そして、社会からの声もわれわれにフィードバックされており、さらなる良循環を生み出す。

今後も小さな一歩を積み上げ、その方法論を世界に発信し、世界全体が公正で包摂的な社会となるための一端を担っていきたいと考えている。

註

- 1) TOEIC は一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会の登録商標である。以下、「TOEIC」とする。
- 2) 松藤みどり (2011) 聴覚障害学生向け TOEIC 対策講座の開催。筑波技術大学 HP 2011 年 10 月 21 日付ニュース, https://www.tsukuba-tech.ac.jp/news/news_2011/hi_2011102101.html, (2011/10/22)
- 3) 太田智加子 (2015) TOEIC® 公開テストの点字受験が始まりました。筑波技術大学 HP 2015 年 5 月 20 日付ニュース, http://www.tsukuba-tech.ac.jp/news/news_2015/vi2015052001.html, (2015/5/21).
- 4) 実際、英語に限らず各種の資格試験における試験時間延長措置は一律ではない。例を挙げると、大学入試センター試験 (点字受験者 1.5 倍・点字受験者以外 1.3 倍)、国家公務員試験 (点字のみ 1.5 倍)、司法試験 (個々の状況により最大 2 倍となる問題・1.5 倍となる問題が混在)、医師・歯科医師国家試験 (個々の状況により最大で 1.5 倍)、社会福祉士・精神保

健福祉士・介護福祉士 (点字等 1.5 倍・弱視等 1.3 倍)、などである。

- 5) 2013 年 11 月 1 日付の照会で、この時点ではまだ公開テストにおける点字試験実施前であったため、『点字毎日』の記事でも確認ができなかった。
- 6) 統一英語点字の「統一」には 2 つの意味がある。1 つは、各国の間の表記規則の差異をなくし統一を図ること。もう 1 つは、一般文章から数学・理科・情報処理まで、あらゆる分野を統一的な規則体系でカバーすることである。詳細は、以下を参照。
福井哲也. UEB ベーシックマスター 英語点訳の基礎. 社会福祉法人 日本ライトハウス. 2016.

文献

- 1) 福井哲也 (2016) UEB ベーシックマスター 英語点訳の基礎. 社会福祉法人 日本ライトハウス.
- 2) 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018) 上場企業における英語活用実態調査 2013 年報告書. 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, http://www.iibc-global.org/toeic/official_data/lr/katsuyo_2013.html, (2018/9/30).
- 3) 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018) 点字受験について. 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, http://www.iibc-global.org/toeic/priority_support/tenji.html, (2018/9/30).
- 4) 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会 (2018) 2016 Report on Test Takers Worldwide: The TOEIC® Listening and Reading Test. 一般財団法人国際ビジネスコミュニケーション協会, http://www.iibc-global.org/library/default/toeic/official_data/lr/pdf/lr_transition_2017.pdf, (2018/9/30).
- 5) 毎日新聞社 (2016) TOEIC の点字受験 個人でも可能、好評に ~ 弱視者向けの拡大版も ~. デジタル毎日, https://mainichi.jp/articles/20161013/ddw/090/040/019000c?_ga=2.177875557.1383939902.1533907016-1942977142.1533907010, (2018/9/30).
- 6) 毎日新聞社 (2017) 全盲記者 岩下恭二のユニバーサロン TOEIC に点字で挑

- 戦. デジタル毎日, <https://mainichi.jp/articles/20170204/ddl/k13/070/003000c>, (2018/9/30).
- 7) 松藤みどり (2011) 聴覚障害学生向け TOEIC 対策講座の開催. 筑波技術大学 HP 2011 年 10 月 21 日付ニュース, https://www.tsukuba-tech.ac.jp/news/news_2011/hi_2011102101.html, (2011/10/22).
- 8) 文部科学省 (2015) 国立大学法人筑波技術大学の平成 26 年度に係る業務の実績に関する評価結果. 文部科学省, http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/_icsFiles/afieldfile/2015/11/04/1362130_6.pdf, (2018/9/30).
- 9) 太田智加子 (2012a) 視覚障害を持つ学生に対する TOEIC 対策. 第 21 回視覚障害リハビリテーション研究発表大会抄録集, 75.
- 10) 太田智加子 (2012b) 視覚障害を持つ学生への英語資格試験対策指導. 第 13 回日本ロービジョン学会学術総会プログラム / 抄録集, 109.
- 11) 太田智加子・松藤みどり (2012) 聴覚 / 視覚に障害を持つ学生に対する TOEIC 対策. 筑波技術大学テクノレポート, 19(2), 12-16.
- 12) 太田智加子 (2013) 視覚障害を持つ学生に対する TOEIC 対策. 視覚リハビリテーション研究, 2(2), 71-74.
- 13) 太田智加子 (2014) 視覚障害を持つ学生への英語資格試験対策指導. 日本ロービジョン学会誌, 14, S16-20.
- 14) 太田智加子 (2015) *TOEIC®* 公開テストの点字受験が始まりました. 筑波技術大学 HP 2015 年 5 月 20 日付ニュース. http://www.tsukuba-tech.ac.jp/news/news_2015/vi2015052001.html, (2015/5/21).